

PAC分析の理論と実施技法

内藤 哲雄

(明治学院大学 国際平和研究所)

キーワード：PAC分析、関連する理論と技法の差異、利活用のポイント

【はじめに】

技法開発の動機は、実験社会心理学を主専攻とした後に、6年6ヵ月にわたって臨床心理学担当の専任の職に就き、再び元来の専門である社会心理学の講座を担当するようになって、「個」の独自性や豊穡を看過できないと感じたことによる。PAC分析のPACは、Personal Attitude Construct(個人別態度構造)の略称であり、“パック”と発音される。当該テーマに関する自由連想(アクセス)、連想項目間の類似度評定、類似度距離行列によるクラスター分析、被検者によるクラスターのイメージや解釈の報告、検査者による総合的解釈を通じて、個人ごとに態度やイメージの構造を分析する方法である。当該テーマに関する検査項目を対象者自身が連想し、ただ一人の対象者が暗黙のうちにもつ潜在構造を、その人の回答した類似度距離行列を用いてクラスターを算出する。ついで、被検者に寄り添いながら、被検者のクラスターや項目のイメージ報告を検査者が間主観的に了解していくところに特異性がある。繰り返しデータがなく、平均値も分散もないのに、記述統計学を援用して、当該個人独自の態度やイメージの構造を分析する。典型者、少数の該当者、個人個人の個人分析に適している。

PAC分析では、独自の体験を含めて当該現象に関連すると当人が感じるすべての変数にアクセスすることから、主體的、独自の、創造的、歴史的、社会的、超越者的な、当該個人特有の全体構造の分析となる。Allportが指摘しているように、個人のパーソナリティには、全ての人をもつ「共通特性」と個人独自の人特性」の二種の特性が存在する。パーソナリティ検査には行動予測力がないといわれる。これは、個人特性を無視して、共通するパーソナリティ変数(だけ)では個人の行動予測力が高くないことを示すものである。態度についても同様のことがいえる。個人分析の結果は、Lewinの場理論、Jungのコンプレックス構造、Berneの交流分析(TA)での脚本分析、Gendlinのフォーカシング、認知行動療法など、個に関する多様な実践、研究に利活用できる。被検者が長期記憶や暗黙裡の潜在構造にアクセスしやすくなるような、検査者の読み上げや応答のスピードや間の取り方をし、同行しながら探索を繰り返し要請する技術が、通常ではアクセス困難な内界深くの潜在構造を引き出す。事例を操作的、客観的に分析でき、当該テーマについてアクセスされた被検者の内界を、検査者が同行しながら了解していく過程は、第三者が了解していく過程ともなりえる。コンサルテーションのツールとして有効で、学位論文の主査や副査が事例を了解していく手段ともなる。ただし、「操作的・実験的・(記述)統計学的手法と、間主観的・カウンセリング的・事例記述的手法の両方が包含されており、両技法を習熟しているものは少ない。ワークショップでは、他の理論や技法との違い、潜在的イメージの持つ意味、研究テーマの発見法、被検者の内界探索の方法、価値創造的な解釈の仕方を実習形式も含めて実践的に学ぶ場としたい。

<関連するアプローチ、理論と技法の違い>

多標本調査：平均値と分散による共通の普遍性の解明

PAC分析：被検者にとって関連すると感じられる変数の全て

(共通特性と個人特性)

<単一事例分析と諸技法の比較>

SD法、P技法、Q技法、レパトリーテスト、1事例実験

*尺度観、意味空間、世界観の違い

<研究テーマの発見→連想刺激の作成>

視点の転換

- ・独自の・独創的研究テーマを見つける
- ・視点転換の努力を続ける
- ・構成概念の創造
- ・製品開発、商品開発(大量の類似品が普及する前で開発者の頭の中にしか存在しない)

<イメージの聴取・探索>

- ・身体感覚を感じる
- ・感覚変化のスピードを感じる
- ・共感し、同行する
- ・話しかけるスピードによるコントロール
- ・単語の間、文章の間をコントロール
- ・自分のイメージを誘導する
- ・相手のイメージを誘導する
- ・長期記憶にアクセスさせ、探索させる
- ・イメージが湧くまで待つ
- ・内界奥深くを探索させる
- ・「もうない」からが始まり

<データの解釈>

- ・デンドログラムの連想項目、聴取したイメージを丹念にたどる
- ・全体がゲシュタルトとしてまとまるのを待つ
- ・結果を先行研究と関連づけて解釈する
- ・他の人がまだ考えていない価値創造的な解釈を、最後の1分1秒まで求める
- ・シミュレーションによる一般化の確認(他の事例を抱負に思い浮かべ、何が起きるかをイメージしてみる)
- ・自我防衛的にならないようにして、自己批判をしてみる
- ・別の解釈可能性を忘れない
- ・連想項目は個人独自のニュアンスやエピソード記憶とも連結しており、それらがクラスターを構成する時、クラスターの連想価は爆発的に高まっていく。(連想刺激→連想反応項目→クラスターの束→クラスター間比較を通じて、内界の奥深くまで探索が続く)

<開発の継続>

- ・さらにさらに問題、テーマを掘り下げていく。
- ・自分自身の体験の蓄積から暗黙のスキーマが形成されることが多い。帰納法と演繹法を循環させ、自信の無意識世界に光り、視点をあて何が連想されてくるかを探り続ける。暗黙知、「クライアントは自らが知っている以上のものを捉えている」のである。

(ないとう てつお)